

■鈴木天眼　　明治大正期に、長崎で活躍した反戦反骨のジャーナリスト。日本とアジアの友好を説き続けた。

すずきてんがん

大政奉還・・・1867＝　　陸奥国安達郡二本松で、藩士鈴木習の長男に生まれる。本名は力。父が誕生前に死去したため、7つ上の姉ウメとともに、母ヤイの手で育てられ、

明治維新・・・1868＝　1歳：戊辰戦争では、二本松藩は隣の会津藩とともに、新政府軍と戦って大きな犠牲を出したが、討ち死した祖父の話はじめ、両藩士の壮烈な最期を聞かせるうち、権力に屈しない反骨精神が養われたようだ。

明治6年政変　1873＝　6歳：　　非常に勉強好きで、郷里で竹内東仙に就いて漢籍を学び、

三つの反乱・1876＝　9歳：　　

沖縄県編入・1879＝12歳：　福島県郡役所の給仕になるも、

・・・・・・1880＝13歳：　上京し、会津出身の署長赤羽友春宅に寄宿しながら、浅草署の給仕として働くうち、赤羽の紹介で、イギリスから帰国した\_日下義雄の書生になり、その薫陶を受けて勉学も一気に進み、生涯の恩人になる。

明治14年政変1881＝14歳：　　日下は、会津藩侍医の子で、戊辰戦争では大島圭介らと落城前に会津を脱出し、箱館戦争に加わって捕虜になり、赦免後は、会津出身を隠すために改名、やがて井上馨の知遇を得、その推挙で岩倉欧米使節団に同行してアメリカ留学、一旦帰国後、ロンドンで経済学を研究、帰国後は内務省などに勤務、諸職を歴任後、

岩倉具視没・1883＝16歳：　　大学予備門に入学、全科目で良い成績を収めるも、早くも反骨精神が出てきて自主退学、

内閣発足・・・1885＝18歳：　　

帝国大学始・1886＝19歳：　この年、初代長崎県令になった日下義雄は、長崎市にダム式としては初となる水道事業を実現、

国民之友始・1887＝20歳：　　\_政府が突然保安条例を制定し、星亨ら民権派を東京から追放、創刊したばかりで、星が主筆を務めていた自由党機関紙{公論新報}の発行が危機に瀕すると後を託される一方、独自の{活きた学問}“活学”を提唱、

初の対等条約1888＝21歳：　　\_青年に呼びかけるべく、初の著書「独尊子」の執筆を完了するも、結核を発病して咯血、友人4人が出版に漕ぎつけてくれ、この書を読んだ谷干城は‘後世畏るべき青年’と激賞したことを、尾崎行雄、犬養毅が主宰する{朝野新聞}で報道、爆発的に売れ、一躍文名が上がるが、米紙から大隈重信外相批判の記事を転載したことで8ヶ月投獄され、釈放された時には衰弱ききって転地療養が急務となったことから、長崎県令を務める日下を頼って、長崎に赴き、療養の合間に街を歩いて観察、

帝国憲法発布1889＝22歳：　「新々長崎土産」(翌年には増補版)を出版すると、

帝国議会始・1890＝23歳：　この年、やはり、会津藩士の子で1つ上の西郷四郎が、曲折を経て嘉納治五郎の講道館に入門し活躍するも、新たな人生を歩みだそうと突然出奔している。\_県令退任した日下の後を追うように帰京。友人らと雑誌{活世界}を創刊するも、繰り返し発行停止処分、廃刊に追い込まれ、個人で、思想信条を世に問うべく、

大津事件・・・1891＝24歳：　「活青年」、

大本教・・・1892＝25歳：　「立身問答」、

郡司千島探検1893＝26歳：　「丈夫の本領」を出版して名声、秋山定輔が{二六新報}を創刊するに当り、主筆として迎えられ、　、藩閥政治を批判して、たびたび発行停止処分を受ける間、

日清戦争始・1894＝27歳：　西郷四郎の旅券を借りて、\_甲午農民戦争(東学党の乱)に際して、東学党を支援する事を名目として釜山外国人居留地の日本人らが結成した壮士集団{天佑侠}の結成に参加すべく、朝鮮へ渡るも、日清戦争勃発によって霧消し帰国、官憲に追われる逃避行を経て、主筆に復帰すると、舌鋒はさらに鋭くなって、

日清戦争終・1895＝28歳：　\_休刊に追い込まれるに至り、

八幡製鉄始・1897＝30歳：　「小日本敷大日本敷」を出版するも、自由な言論活動ができない東京に限界を感じ、新天地を求めて、

Bushidou・・・1899＝32歳：　長崎で、実業家と{九州日の出新聞}を創刊、社長兼主筆になるも、

田中正造直訴1901＝34歳：　新たな人物が現れ、乗っ取られてしまうも屈せず、

教科書疑獄・1902＝35歳：　同志西郷、その講道館仲間福島熊次郎らと、\*‘長崎から世界を見通す’意気込みで、不偏不党の{東洋日の出新聞}を創刊、社長兼主筆社員総出で創刊号を配達し終えると、宣伝のため、市中を法被姿で練り歩き、また、創刊を記念して、瓊浦(のち長崎)游泳協会を設立、水泳鍛錬道場も開き、以後、毎年のように大会。

日比谷公園・1903＝36歳：　

日露戦争始・1904＝37歳：　\_あわせて、国政にも関与すべく、第9回衆議院議員総選挙に立候補するも落選、

日露戦争終・1905＝38歳：　長崎に5つの新聞社が乱立する状況下、\_日露戦争で、捕虜になったステッセル將軍との単独会見に成功するも、検閲で記事の多くが消された状態で発刊する抵抗を示し、終結時には、ポーツマス条約をめぐって、世論が‘講和反対、戦争継続’の強硬論で沸騰するなか、敢然と他紙を批判して‘講和支持、即時和平’主張、

韓国反日暴動1907＝40歳：　「神物人感應如是」出版、

アラビ’創刊・1908＝41歳：　\_第10回衆議院議員総選挙に当選すると、帝国議会では、舌鋒鋭く政府を追及するも、一人議員で限界、

伊藤博文暗殺1909＝42歳：　「清正公」出版、

韓国併合・・・1910＝43歳：　早くも、‘男子偏権、女性奴隷の日本社会’を告発、‘女性は産児器械ではない’と明言、

大逆事件判決1911＝44歳：　\_辛亥革命が勃発すると、中国民衆の立場にたって、支持を表明するなど、東亞問題を中心に、理知的で正義感と反骨精神にあふれる新聞として、評価が確立したばかりでなく、

明治天皇没・1912＝45歳：　西郷四郎が現地取材するも、リューマチ悪化で無念の帰国。\_議員生活は一期で終わるが、天皇機関説論争が起きるや、学問上では美濃部達吉が勝利するものの政治的に犠牲にされた、裏にある政治の暗流を察知、吉野作造らも触れない天皇神格化批判、以後没するまで、真の憲政擁護の論陣を張り続ける。

大正政変・・・1913＝46歳：　革命達成後、中華民国政府を代表して、日本を公式訪問した孫文は、\_宮崎滔天と同行、わざわざ長崎を訪れ見舞いに來宅して感謝の気持ちを伝え、西郷四郎ら社員と歓談。

第一次大戦始1914＝47歳：　南洋の視察を試みた。

ベルサイ条約・1919＝52歳：　‘女工直ちに8時間労働を～人道問題を軽視してはならぬ’など、\_現代にも通じる男女同格論により、平塚らいてう、市川房枝らの婦人解放運動を間接的に支援支援、

原敬首相暗殺1921＝54歳：　

水平社結成・1922＝55歳：　少しではあるが、女性の政治参加への道がようやく開ける。

関東大震災・1923＝56歳：　大震災には、遠方になりながら、人民による朝鮮人虐殺、憲兵隊による大杉栄の虐殺に怒る。

護憲三派圧勝1924＝57歳：　孫文は、神戸で“大アジア主義演説”を行った最後の訪日の際にも、長崎港の船上から、同紙記者に、病気を気遣い激励する伝言を託してくれたのに応え、紙面で、日中が平等互惠の精神で結ばれるべきとする\_独自の大アジア主義を展開し続けるが、日本の軍国主義が本格化する前に、

円本時代始・1926＝59歳：　\_没した。

高橋信雄は、その著書の「はしがき」を’創刊から没するまで、軍国主義に反対し、日本の満州進出の実態を暴いて非難、韓国併合後の現地での日本人の傲慢さを憤り、第一次世界大戦への参戦に反対し、戦中、戦後の対応を批判、孫文の大アジア主義に先立って論じる一方で、頭山滿や内田良平らのアジア主義を、軍の傀儡とまで呼んで非難、一貫した思想のもと、勇氣ある発言を続け、長崎県内の新聞購読部数数シェア1位の座を守り続けていた’と結んでいるが、その面影はなお、原爆を投下された長崎県民の、戦後の動きにも幾分かは反映しているように思える。